

[連載] 第42回

清々しき人々

月尾 嘉男 (東京大学名誉教授・工学博士)

独力で運河を開削した 角倉了以・素庵父子

室町時代中期から江戸時代前期にか

京都三大長者の角倉家

日本では都市の大半が沿岸にあるため、海路で物資を輸送してきました。土地の勾配が急峻のため河川が急流であり、運河は発達しませんでした。しかし内陸にある都市では舟運も必要であり、わずかですが運河が建設されています。その代表が京都の都心に建設された「高瀬川」です。これは森鴎外の晩年の小説「高瀬川」の舞台として有名ですが、京都の商人が私費で建設した運河です。その商人の角倉了以と素庵という父子を今回は紹介します。

一九世紀前半に蒸気鉄道が実用になるまで、内陸の物資の輸送手段の中心は舟運でした。平坦な土地が大半であるヨーロッパやイギリスでは多数の運河が掘削され、河川に勾配がある場所では閘門という水位を上下させる仕組で運行していました。一例として、産業革命発祥の土地イギリスのマンチェスターには石炭の輸送のために港湾から延長六六キロメートルのブリッジウォーター運河が一七六〇年代に完成しています(図1)。

運河の時代



角倉了以 (1554-1614) 角倉素庵 (1571-1632)

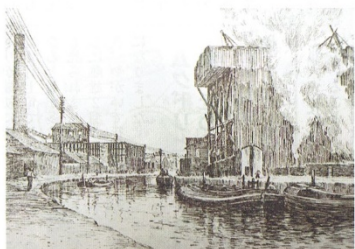


図1 ブリッジウォーター運河

この宗桂は明国へ二度渡航して医療を習得し、その時期の明国の第一二代皇帝世宗の病気を快癒させたことで有名な名医でした。しかし一五七二年に六一歳で死亡し、一九歳の了以が家長となり、了以は医療を実弟に継承させ、自身は経済活動に邁進します。江戸幕府が誕生した一六〇三年に、了以は初代將軍徳川家康から第一回安南国貿易御朱印状を受領し、寛永年間(一六二四～一七〇四)に安南貿易を実行し、巨額の蓄財をします。

角倉の本姓は吉田で近江国吉田村の出身ですが、室町時代中期に初代の吉田徳春が京都の嵯峨に移住し、足利義持の侍医になります。二代の宗隆も足利義政の侍医になるとともに、蓄財を元手に京都で土倉(庶民相手の金庫)や酒屋を経営します。三代の宗忠は長男を土倉の後継、次男を医師の後継として発展の基礎を構築しました。その次男である宗桂が四代として家督を継承し、その長男で一五五四年に誕生した吉田家五代目が角倉了以です。

けて京都には三大長者といわれる豪商が存在しました。徳川家康に見出され戦略物資の調達をして將軍家御用達にまでなり、御朱印船貿易でも活躍。さらには呉服の商売でも成功した「茶屋」・室町幕府の御用進出金師となり、織田信長や豊臣秀吉の刀剣装飾を担当し、徳川家康の下命で金庫、銀座を設立大判小判の鋳造で巨富を蓄財した「後藤」。そしてもう一軒が今回の主役である「角倉」です。



図2 保津川下り

しかし、了以が偉大であったのは、海路による外国貿易は長男の素庵に委任し、舟運による国内交易を増大させたように活躍したことです。最初に手掛けたのが保津川の舟運による丹波は木材や石材など建設資材の産地でしたが、石材は山道を入り馬で運搬する以外に方法はありませんでした。そこで了以は長男の素庵を江戸に派遣、一六〇六年に幕府から開削の許可を取得します。

夏目漱石の「虞美人草」にも保津川下りが登場しますが、河川改修された以後でも急流で、それ以前は物資の運搬には利用できない急流でした(図2)。そこで了以は巨岩を滑車利用の装置で撤去、邪魔な巨石は貿易で入手した火薬によって爆破、浅瀬は砂利を除去、瀑布は上流を改修して落差を減少するなど、様々な技術を駆使して開始から五ヶ月間で工事を完了、平底の高瀬舟で通行可能にしました。工事は自費で実施し、通行料金を回収しています。

丹波の木材は長岡京や平安京の造営にも大量に使用された歴史があります。その木材は筏師が筏流して運搬しており、豊臣秀吉が免許を付与するほど重要な仕事でした。しかし、激流のため木材しか輸送できなかったのですが、了以の工事によって平底の高瀬舟が通行可能になり、丹波の野菜なども京都に輸送されるようになりました。しかし、明治中期に鉄道が開通し、戦後は貨物の輸送には使用されず、観光が主流になっています。

富士川改修への挑戦

この成功の翌年の一六〇七年から富士川に挑戦します。富士川は流路の延長が約二八キロメートルの日本で第三位の大河で、下流の流量が日本第三位という大河で、最上、球磨川とともに日本三大急流とされています。その様子も葛飾北斎の最高傑作「富士三十六景」の「甲州石班澤」に見事に表現されています(図3)。しかし急流ではあるものの舟運が実現すれば、幕府にとっては十分な物流効果が期待される工事でした。

そこで今回は幕府から了以に改修が下命され、徳川家康が現場を視察するほどの重要工事です。一六〇七年に工事を開始しますが、今回は容易な工事ではなく、五年が経過した一六二二年に舟運が実現します。ここでも三日かかっては七〇キロメートルの輸送が半日で可能になりましたが、水難事故も多発する難関でした。しかし、一九二八年に身延線が開通し、三二六年の舟運の歴史を終了しています。



図3 富士三十六景・甲州石班澤

高瀬川開削の契機 そのとき了以はすでに五三歳でしたが

が、河川改修の最後となる工事に挑戦します。その発端は一五六七年の「東大寺大仏殿の戦闘」といわれる内戦で、奈良の都心での戦闘の火災により、大仏殿は消失、大仏本体の頭部も破壊されてしまいました。そこで豊臣秀吉が九五年に代替となる大仏を京都に建立しようとし、一六〇八年の地震で倒壊、秀吉の死後、三男の秀頼が復興しようとしていますが、これも途中で火災が発生、一六〇二年に大仏も消失してしまいました。それでも秀頼は父親の悲願を実現しようとし、一六〇八年に方広寺大仏殿の再建を開始し、一二年に大仏と建物を実現させ、一四年に梵鐘も設置して全体が完成しました。そのとき建物に使用する木材を伏見から陸送するのに難行します。そこで了以と素庵が、これまでの保津川や富士川の経験を背景に、鴨川の水路を利用するなどして手伝い、輸送を実現しました。この経験が高瀬川の開削に発展します。

このころで方広寺大仏殿については有名な逸話があります。すべが完成し、徳川家康の承認により開眼供養をするばかりになっていたところ、七月に家康から延期の命令が到達しました。梵鐘に「国家安康」と「君臣豊楽」という文字が鋳造されていたのですが、前者は家康を分断し、後者は豊臣を君主とする意味ではないかと批判され、最後は年末の大坂冬の陣と翌年五月の大坂夏の陣で豊臣一族が滅亡することに拡大していったのです。



図4 一之舟入

### 集大成の高瀬川開削



図5 明治時代の高瀬川

から、了以は水位に変動のある鴨川の流路と分離した荷物運搬専用の水路の必要を確信、鴨川に並行して京都の二条大橋の西岸から伏見までの一〇キロメートルの区間に川幅約七メートルの運河を開発する計画を、一六〇一年に請願し着手します。伏見からは宇治川を経由して淀川に合流し大坂まで到達するという構想で、開始から三年で完成しましたが、その年に了以は六二歳で死去しました。

用地取得費用、工事費用などを合計すると七万五〇〇〇両、現代に換算すると約一五〇億円になります。了以を自己負担という大胆な計画でした。その内容も用意周到で、二条大橋から四条大橋までの区間には一之舟入から七之舟入まで(明治以後は八之舟入と九之舟入が追加)、舟溜を用意して荷揚げができるようにし(図4)、川沿いには船隻入夫が歩行できる道路も用意され、大坂と京都の物資輸送の幹線となりました(図5)。



図6 高瀬舟

開発資金は角倉家が全額出資しましたが、川沿いに屋敷を構築して運営を管理し、通行料金の四割を幕府に納入維持し、一割を充たし、五割を角倉家の収入としました。年間、約一万両の収入があったと推定され、投資した七万五〇〇〇両は短期で回収されています。残念ながら、時代とともに水運は衰退

### 一流の学者であった素庵

最後に了以の長男の素庵について紹介しておきます。素庵は了以が一八歳のときの子供で、了以の河川工事の手助けもしていましたが、一六〇三年に家康が御朱印船貿易を開始しからは、その事業で活躍していました。しかし本来は学生生活に関心があり、父親と対立しながらも、当時の最高の朱子学者である藤原惺窩に師事していました。そして惺窩の協力により御朱印船貿易に従事する乗員の心得として「舟中規約」を作成しています。

これは現在でも企業の社訓に採用できるほどの内容で、冒頭は「貿易の事業は相手に自分にも利益をもたらす行為であり、相手の損失によって自分の利益を目指してはいけない」という高遠な理念から出発しています。さらに「日本と異国とは風俗や言語が相違しても人間の本性には相違はない。不徳の行動によって日本の恥辱となることをしてはいけない」というように、現代のSDGsを想起させるような内容が記載されています。

乗員についても一人間はずべて兄弟であり、ひとしく愛情の対象であり、危険に出会い、病気に罹患しても、相互に扶助し、一人だけ逃避してはいけない。「狂乱の大波は恐怖であるが、人間の物欲欲求には酒色や色情に比較すれば脅威ではない」と、現代でも通用する心得が記載されています。了以も素庵も出自は商人ですから、河川の運用によって利益を獲得していますが、それ以上に人間として清々しい人生を実現してきた父子でした。



つぎお よしお  
1942年生まれ、1965年東京大学工学部卒業、工学博士、名古屋大学教授、東京大学教授などを経て東京大学名誉教授、2002、03年総務省総務審議官。これまでコンピュータ、グラフィックス、人工知能、仮想現実、メディア政策などを研究、全国各地でカヌーとクロスカントリースキーをしながら、知床半島、羊蹄山麓、釧路湖原、白馬山麓、富川清流塾、瀬戸内海塾などを主宰し、地域の有志とともに環境保護や地域計画に取り組む。主要著書に「日本百年の転換戦略」(講談社)、「縮小文明の展望」(東京大学出版会)、「地球共生」(講談社)、「地球の救い方、水の話」(遊行者社)、「100年先を読む」(モロゾシ研究所)、「先住民の叢書」(遊行者社)、「誰も言わなかった本当は怖いヒックリデス」とサイバー戦争の「カラクリ」(アスコム)、「日本が世界地図から消滅しないための戦略」(致知出版社)、「幸福実感社会への軌進」(モロゾシ研究所)、「転換日本 地域創成の展望」(東京大学出版会) など。最新刊は「清々しき人々」(遊行者社)。

# ざぶん賞

## 2020(第19回)小中学生の作文募集

人が生きるためにもっとも重要な物質は空気、そして水です。その空気や水が今、私たちに様々な問題を投げかけています。小中学生の皆さんが、水について文章を書くことで、水の現在や未来、そして命の大切さを考えてほしいと思います。

### 応募のしかた

- 資格：小・中学生 ●文章：未発表作品 ●字数：1,200字以内
- 用紙：ざぶん賞応募用紙(ホームページからダウンロード)、A4用紙等、または電子データ。
- 形式：タテ書き 濃い鉛筆、またはボールペンで書いてください。
- 記入事項：題名/名前(ふりがな)/都道府県名/学校名/学年/性別/連絡先住所/連絡先電話番号(連絡先が学校の場合はご担当の先生のお名前)
- 送付方法：郵送の場合 〒924-0053 石川県白山市水澄町429番1 ざぶん賞実行委員会事務局まで 電子メールの場合 info@zabun.jp
- 締切：2020年9月7日(月)消印有効

全員に「ざぶん大使認定証」をお贈りします。文章選考委員長は作家の安部龍太郎氏です。入選作品は、画家、イラストレーター、工芸作家がアート作品に仕上げ、贈呈します。選考結果は2020年10月末に発表。全国表彰式を2020年11月に金沢市で、地区表彰式を翌年1月以降に各地区で開催予定です。

●文章作成や応募の際に発生する諸経費は負担しません。●応募書類は返却しません。●応募書類の不慮の破損や紛失の責任は負いません。●入選者以外への選考結果の告知はいたしません。●入選作品の出版権、および著作権は主催者に属します。●入選作品をアート作品化するにあたりタイトルや文章に変更を加えることがあります。●募集内容や選考要項など一部変更することがあります。主催：ざぶん賞実行委員会(委員長 月尾嘉男) 問い合わせ先：事務局 電話 076-287-6782



<http://www.zabun.jp/>